

町小だより

令和3年
3月22日
No. 656
御免町小学校

穏やかに「春」を待ちわびて

校長 藤井 聡

「子どもたちのいない学校で、子どもたちを思い、一方通行の全校一斉送信メールに思いを乗せ、発信することだけが、子どもたちや保護者の皆様とつながり続ける唯一の手段でした。健やかであれと念じるだけの日々が、これほど辛いものであるとは思ってもありませんでした。」・・・これは、ちょうど1年前に記した学校だよりの冒頭部分の抜粋です。あれから1年。感染症対応のための不自由さがありますが、今、子どもたちは学校に居ます。ありがたい。素直にそう思えます。

あれほどまでに降り積もった雪もきれいに消え去り、待ちわびていた春の足音が聞こえます。今朝は、校長室に、顔を出したばかりの土筆をもってきてくれた子がいました。早速、一輪挿しにそっと生けました。「春だねえ。」思わず、声もれました。

この一年、普通であり、平凡であることのありがたみをしみじみと感じる事が幾度となくありました。これまで、当たり前であると思っていた日常が、とても貴重なものであったことに気付かされ、感謝の念を抱かずにはいられなかったのは、私だけではないはずです。

「春の訪れ」は、じっと耐え忍んでいたことから一転して活動的になることを指し、これまで願っていたことが叶うということの例えでもあります。新型感染症拡大防止対策を念頭に置きながら、ひとつひとつの行事や活動、学習内容や形態の改革、変更をじっくりと、そして静かに考え続けたこの1年。令和3年度を目前にした今は、思い描いてきたこの学校の教育のあるべき姿を「学校経営方針」や「グランドデザイン」に落とし込んでいきます。これまで願っていたことが必ず叶うと信じて、子どもたちの姿を思い浮かべています。

3月24日（水）には、76名の卒業生が、この学び舎を巣立っていきます。来賓の御列席や在校生の出席は叶いませんが、卒業生と保護者の皆様、そして、職員とで巣立ちを迎えた最後の式典を創り上げたいと思います。そして、この御免町小学校で学んだことに誇りをもち、さらなる飛躍をすべく、祝福に包まれながら、思いを新たにしてもらいたいと願っています。